生涯音楽学習の活動▼みんなの音楽、みんなで音楽

瀧廉太郎記念全日本高等学校声楽コンクール

瀧廉太郎記念全日本高等学校声楽コンクール事務局（竹田市文化会館主査）●江渡（えどう）孝行

TOGETHER WITH MUSIC

二〇〇八年秋、国民体育大会が四十四年ぶりに開催されることで、全国の注目が集まる大分県。広く国民の間にスポーツを普及し、スポーツ精神を高揚して国民の健康増進と体力の向上を図ることを目的に、第一回の国体が開催されたのが戦後間もない昭和二十一年。その僅か一年後、天才音楽家瀧廉太郎を顕彰する記念の音楽祭（第一回目は「楽聖瀧廉太郎追悼四十五周年記念音楽會」）は、彼が幼少時代を過ごした大分県竹田市の地で始まった。

竹田市は平成十七年四月一日に、隣接の荻町、久住町、直入町と合併して新しく「竹田市」が誕生した。現在、人口約二万六千五百人。広大な高原、くじゅう山系や祖母・傾山系の山岳、湧水等の自然資源や、城下町の町並み等の歴史的・文化的資源に恵まれ、基幹産業の農林業をベースに、商工業、観光産業で成り立っている。

瀧廉太郎記念音楽祭の誕生には、当時（昭和二十一年）大分県社会教育課嘱託・妻城良夫氏（故人）の多大なる尽力があった。瀧廉太郎は幼少時代を竹田で過ごし、荒れ果てた岡城に登って遊んだ印象が深かったとされ、一九〇〇（明治三十三）年に中学校唱歌「荒城の月」を作曲し、発表している。竹田市出身の妻城氏は、郷里に縁のある楽聖瀧廉太郎の偉業を顕彰するとともに、新日本文化国家建設の標旗と仰ぎ、一九四七（昭和二十二）年に「瀧廉太郎記念音楽祭」の企画、推進、設立に着手したのだった。妻城さんの遺した私記によれば「…敗戦のショックに戸惑う青少年たちに、夢と希望を与え、又一般県民の音楽文化昂揚興隆にも役立つのではないだろうか…」とある。そして、毎年秋に竹田市・岡城跡で開催することを決めたのだった。以降、「瀧廉太郎」「荒城の月」「岡城」が三位一体で全国的に知られることになるが、それにはもうひとつの理由があった。当時社会的に有名だった文化団体「火の会」メンバーが国指定史跡岡城跡の「瀧廉太郎記念音楽堂」建設に関わったことである。

しかし、文化財保護法の適用の史跡であった城址内に建造の認可がおりることは難しく、仮設名目でようやく木造の野外音楽堂が三楽亭跡につくられたのだった。それは、当初提案のあったギリシャ野外劇場風のイメージからは大きく掛け離れたものとなった。

かくして「音楽祭」はその「瀧廉太郎記念音楽堂」で、昭和二十三年から昭和三十八年までの十六年間にわたって開催されたという記述が残っている（その後、音楽堂は昭和四十八年頃まで存在した）。「音楽祭」は竹田高等学校体育館、竹田市文化会館へと会場を移している。

この音楽祭の歴史は長く、財政難で開催不可のピンチに陥ったり、町が大水害に遭い、会場が学校体育館に変更を余儀なくされる年もあった。しかしながら、これまで六十一年間、一度も途切れることなく開催されてきたのだ。それは取りも直さず、さまざまな形で貢献された市民と関係者の熱意と努力の賜物

に相違ない。

創設二年目（昭和二十三年）からは「瀧廉太郎記念音楽祭」として開催されるようになり、「大分県郷土大音楽祭入賞者発表会」や「高校独唱コンクール」、審査員による「独唱会」等の内容で盛大に行なわれていた。その後も、第三十三回（生誕百年記念）では「森山良子コンサート」や「作詞作曲コンクール」の募集、第三十五回では「フィーデル弦楽四重奏団演奏会」、第四十三回（市制施行三十五周年・生誕百十周年記念）では「九大コールアカデミーと市民による瀧廉太郎全作品演奏会」、第四十八回では「佐藤しのぶリサイタル」等々、さまざまな音楽事業を通し、良質で魅力ある音楽にふれる機会を市民に提供してきた。

三楽亭跡（岡城址）にあった「瀧廉太郎記念音楽堂」。昭和23年から昭和38年までの16年間、音楽祭はこの野外音楽堂で開催されていた。

熱唱する高校生。第16回瀧廉太郎記念音楽祭の様子（昭和37年）。

第61回瀧廉太郎記念全日本高等学校声楽コンクール

伊藤京子審査委員長による審査講評

また、声楽コンクールにおいては、第三回（昭和二十四年）に「九州各県高等学校声楽コンクール」になり、第六回（昭和二十七年）からは「西部日本高校独唱コンクール」へ。平成四年からは「全日本高等学校声楽コンクール」となり、全国規模に拡大をした。

その後しばらくは「第〇回瀧廉太郎記念音楽祭・第〇回全日本高等学校声楽コンクール」と称していたが、四年前から「音楽祭」の輝かしい歴史である回数は残し、『瀧廉太郎記念全日本高等学校声楽コンクール』と簡略化した。

さらに当コンクールからは、今は亡きバリトン歌手立川清登さんをはじめ、「もののけ姫」で一世を風靡したカウンターテナーの米良美一さんや「第十一回チャイコフスキー国際コンクール」（一九九八年）声楽部門で第一位の佐藤美枝子さんほか、世界の舞台で活躍する多くの音楽家をこれまで輩出してきた。『音楽のまちづくり』を掲げる竹田市としては、出身者の活躍こそ朗報であり、紛れもなく財産といえる。

当コンクールの出場資格は、日本国内の高等学校に在学中の生徒で、各都道府県教育委員会、または各都道府県高等学校文化連盟、同じく高等学校教育研究会音楽部会の推薦を受けたものとしている。都道府県単独の代表を選考する方法がない場合は、学校長推薦で出場可能とする。ただし、現在ひとつの都道府県に二校以上の学校推薦による申込みがあった場合、運営委員による選考会を開き、代表者を決定する措置をとっている。

選曲等については、予選・本選ともに同一曲とし、出場申込み後に変更は認められない。課題曲は瀧廉太郎作曲の「荒磯」、「荒城の月」、「納涼」及び山田耕筰編曲の「秋の月」から一曲。「荒城の月」は山田耕筰編曲で、一番から四番までの歌詞のうち希望する二番を選択とする。

規模を全国に拡大した以降も、さらにコンクールの知名度をあげるため、出場者に一定の補助を定めている。交通費助成金として、北海道・東北地区は、独唱者・伴奏者・引率者の各一名につき二万円。関東・中部地区、及び沖縄県は各一万円としている。さらに、宿泊費についても、独唱者・伴奏者各一名二泊までを主催者が全額負担をしている。

表彰は、第一位に文部科学大臣賞をはじめ主催、後援者の賞状・楯を贈る。そして出場する高校生にとって最大の魅力は、瀧廉太郎賞として、一位にはウィーン短期留学助成金六十万円、二位に四十万円が贈られることであろう。モーツァルト、ベートーヴェンをはじめ、数多くの作曲家が活躍し、「音楽の都」と呼ばれているウィーン。国立オペラ座、シュテファン大寺院、ケルントナー大通り……憧れの街での留学生活。そして、ウィーン国立音楽大学教授による本格的なレッスンや本場のオペラ鑑賞等は、将来声楽家を志す者にとっては、貴重な体験となるはずである。

この経験を今後に活かしてもらうため、留学の成果を発表する場も設けている。毎年本選終了後に、「ウィーン短期留学報告演奏会」を行なう。当コンクールは入賞するだけがその目的ではない。入賞者のその後の成長ぶりを見届けるこの機会は、教育の醍醐味だと信じている。

二〇〇七（平成十九）年十月十九日、「第六十一回瀧廉太郎記念全日本高等学校声楽コンクール」に出場する各都道府県代表の高校生たちが、日本一を目指すためこの山間のまちに集った。JRを乗り継ぎ、豊後竹田駅に降り立つ出場者や、飛行機で熊本空港から特急バスに揺られて「竹田温泉花水月前」のバス停で降り立つ出場者らをはじめに出迎えるのは、市職員のスタッフである。

「おつかれさまでした。ようこそ竹田市へ」。

不慣れな土地で道に迷うことがないように受付会場まで、車で（可能な範囲で）送り届けることからこの大会は始まる。

初日の夕刻、大ホールにてコンクール開会式が執り行なわれた後、予選出場の順番を決める抽選会がステージ上で行なわれる。張り詰めた空気の中で抽選器を回すガラガラガラッ、という音が響く。番号が読み上げられるたびに、会場は一喜一憂する声がもれる。予選の歌唱順は、それ程運命を左右する。

抽選会終了後、一階の大会議室へ移動し、歓迎レセプションが行なわれる。自己紹介や予選の意気込みなどを一人ずつ語る（なかには実家のラーメン屋を臆気もなく宣伝する者も…）。そこは全国から集まった同世代の出場者たちと交流を深める場となっている。卒業後に大学キャンパスで再会し、「タキレン出てたよね！」と、盛り上がり交友が広がるそうだ。レセプションの締めは市教育長指揮による恒例の「荒城の月」全員合唱。決戦前夜、会場は終始和やかな雰囲気に包まれていた。

十月二十日。全国三十一校三十二名の出場者たちは、早朝から一人あたり五分間のステージ練習を行なう。

コンクール期間中の昼食は、地元の婦人会による手料理が振る舞われる。田舎の素朴な味の「だんご汁」や、竹田名産の「椎茸の佃煮」、大分名物の「とり天」、採れたて野菜のサラダ等々、地元の食材をふんだんに活かしたご馳走がテーブルせましと並ぶ。もちろん引率の先生や応援に駆けつけた家族のみなさんにも召しあがっていただいている。なかでもだんご汁は好評で、「竹田の味」を毎年楽しみにしている審査員もいる。

「どっからきたん？　がんばんなあえ！」

婦人会のおばちゃんが方言丸出しの言葉で出場者の高校生たちに話しかける。この世代を越えたふれあいも他の音楽コンクールにはない地域交流の一コマだ。

午後一時、予選開始。途中二回の休憩を入れて、三十二名が歌い終わる頃には午後五時を過ぎていた。予選の集計が終わり、十一名

の本選出場者が決定。近年になく実力が伯仲しており優勝の行方はわからない。当コンクールの場合、予選での成績は本選に関係が無く、当日に実力を出し切って歌えるか、どうか。本選一発勝負で優勝者が決定する。

大ホールには名前の呼ばれた本選出場者のみが残った。翌日の本選歌唱順を決める抽選会が行なわれるためだ。予選を惜しくも通過できなかった生徒たちで出口ロビーはごった返している。予選落ちのショックでうずくまって泣いている者、宿泊先のホテルまで川沿いをひとりトボトボと歩いて帰る者、ホテルをキャンセルして早々と帰郷した者…。このコンクールにすべてを賭けてきた高校生の長き戦いが終わった瞬間だった。

十月二十一日。本選は正午とともに開始。十一名は最後のステージで歌いきった。「第六十一回瀧廉太郎記念全日本高等学校声楽コンクール」を制したのは熊本県代表ルーテル学院高等学校二年生の中川恵美里（えみりい）さん。中川さんは百五十人が参加した熊本県予選で金賞。課題曲「荒磯」（作歌／徳川光圀）、自由曲「亡命者」（ロッシーニ）。難曲といわれる「荒磯」を女性が歌って優勝したのは初の快挙。また二年生で優勝したのは長崎県代表の吉川友理さん（当時、長崎西高）以来八年ぶり。

思い起こせば、この日を境に中川さんの運命は大きく変わった。二〇〇八年二月、熊本シティオペラ協会主催『２００８オペラガラコンサート』出演、同二月日本テレビ系『夢にエール』出演、同四月ＲＫＫアトリウムコンサート『早春の歌声～中川恵美里の世界～』出演、同六月昭和音楽大学主催『第九回 高校生のための歌曲コンクール全国大会』で優秀賞、老人ホーム慰問コンサートやチャリティーコンサートほか多数…。活躍の場が一気に広がり、プロの歌手になりたいという将来の夢にまた一歩近づいたようだ。実行委員会一同、今年の留学報告演奏会での再会が今から楽しみで仕方ない。

昨年の大会期間中に聞いた話で、竹田の民芸品「姫だるま」が勝利を呼ぶダルマ（効果バツグン？）として噂になっていたらしく、付き添いで来ていた母親が急遽工房に駆け込んだらしい。それは地方の音楽祭ならではの「その町の楽しみ方」のひとつかもしれない。

瀧廉太郎が幼少時代を過ごした城下町で行なわれる、地域の人びとともに創る世界にひとつだけの、特別な音楽祭。目指すのは、次世代の若き声楽家たちが、未来に翔（はばた）くきっかけとなるような「声楽コンクール」。この地ではこれからも、瀧廉太郎の偉大なる功績を讃え、広く伝えていくだけでなく、子どもたちが声楽を学び、人が人を育てる場所で在り続けたい、と心から願っている。

中川恵美里さん

歓迎レセプション。予選前夜、全国から来た高校生同士の交流の場となる。

第61回瀧廉太郎記念全日本高等学校声楽コンクール
フィナーレ「荒城の月全員合唱」（指揮は三林輝夫審査員）

第61回瀧廉太郎記念全日本高等学校声楽コンクール本選出場者記念撮影